

合田強の『西洋医述 卷四』の解題と翻刻

板野 俊文、田中 健二

香川大学

はじめに

本稿では、江戸中期の讃岐の医家であった合田強⁽¹⁾（一七二三～一七七三）の著した『西洋医述 卷四』について述べる。これは強が宝暦十二年（一七六二）正月より同閏四月末まで長崎を訪れ、阿蘭陀大通詞である耕牛吉雄永章⁽²⁾（一七二四～一八〇〇）と、その弟の蘆風吉雄永純の成秀館で学んだ講義録であり、五巻からなるもののなかの第四巻である。この講義録をまとめて一巻として残された本が『紅毛医言』である^(3,4)。この中の『紅毛医言』⁽⁴⁾と『西洋医述 卷三』⁽⁵⁾に関しては、既に我々が報告した。重複を避けるため必要な説明以外はしない。先行論文を参考にしたい。

巻四の特徴は植物の図が挿入されていることである。これはドドネウスの『Cruydt-Boeck（植物図誌）』を写したものと考えられる。合田強と同郷の平賀源内が第二回目の長崎行をしたのは、明和七年（一七七〇）

といわれているが、この『Cruydt-Boeck』の翻訳が第一の目的であったことが指摘されている⁽⁶⁾。

また、巻四では、永富独嘯庵が『紅毛医言』の叙⁽⁷⁾で述べているように、汗吐下方についてもかなり詳しく解説している。

本論文の目的は、すでに指摘した先行論文の重複になるが、吉雄耕牛の医学的な知識がどれほどであったかを知ることであり、またそれを書き残した合田強の業績を顕彰することである。

凡例

一 この書は吉雄耕牛の講義録の五巻中の四巻（『西洋医述 四』である）。

一 今回、翻刻したのは香川大学附属図書館医学部分館に所蔵されている複製本であり、これは、原本のコピーを製本したものである。

一 本文は漢字とカタカナで書かれているのでそのままの形で翻刻し

- 一 た。また見え消しは原文に従った。
- 一 本文中日本語の横に書かれているオランダ語の発音は本文のポイン
トより小さいポイントを用い、日本語の横に書いた。また説明の部
分も同様にした。
- 一 筆者の注は「」を用いて書いている。() は筆者の説明である。
- 一 図は原文を元にして写図を作成した。
- 一 解説不明な部分は□を用いて示した。

翻刻

(表紙)

大秦国 出後漢書 又 三国史
ハルシヤハ此近国也 軒掛 珊瑚樹

道具細工人

中根甚太郎

外国 七奇

銅人形橋 自島至島橋下通数船

自閏四月十六日至同月二十二日記焉

西洋医述 四

(表紙裏)

天上無風惟有氣雖一紙不揺

(本紙)

閏月十六日

◎

〇吐方

吐方ニ輕重アリ胃ノ上口ノ間ニ吐薬ガイテサハルトムカ
くトサスルコト也

ポウトルニ少塩ヲ少加テ暖水ヲ交テ用ユル也 又暖水ニ
ポウトルヲ少加テ用ル也 暖水ニ鶏油ノ如キナマクサキ
塩ナシノ

油ヲ入テ吐スヘシ 鳥羽ニテ胸ヲワルクサセテ吐ヲ催ス
也

中劑

コ

タルウクネセルチネ 和無
コロウクスメタロウリヨム ケレイン三ツ

未詳

メリクウリユスヒイタア 三ケレイン 製薬也 和無
タルタアリユス

キメテエクスー カラノウル ケレイン四 和無
トルペテムジネラア 梅毒ニ用 吐下ヲナスモノ也 石金類

レヘ ケレイン五

白丹膏也 沢山ナリ

製薬也 和無

ヒツテルムアルビイ 五匁 ヒツテルヨヲル アンテモウニイ
丹膏也

五匁 ケレイン 十二迄

前二出

キロユシイメタロシリヨム ケレイン十 根ト云コト
ラアテキシアザリイ

同イニヒユスは八十二匁
加味ト云コト

一味ト云コト
シビスタント 五匁

葉ノコト 丸葉ノ杜衡細辛花紫 根ニ花ク
シビスタント アザリイ 根ニ花ク
シビスタント ゲレイン五
一味ト云コト

エツキスタラクト アザリイ シコロブル一
杜衡細辛

葉ト云コト 草類 〇知
ホウリヤガラテヨル 細末シテ シコロフル 二ヨリ一匁迄
下薬也 別ニ凶アリ

ガラテヨルノ汁 シコロフル 一 五分迄

タバコノコト 加味ト云コト 蜜ト酢ノネリ合セタル物ナリ
ニコチヤナイン インヒユス 一匁 ヲクシイメルシクリテキ
別ニ分ヲシルス

四匁

山ヨリ出ル石ノ如キモノ

蜜ネリニスルコト
セイロラプエメテイク ナンゲルナル一四匁
和無

セイロラプハ 蜜ト云コト

セイロラプエメテイク ニコシヤナ 二匁 四匁迄

蜜ニテタハコノ汁ヲネリタルモノナリ

重劑

重劑ノ三味ハ不可輕用 常中劑可用歟

ニゲリイノ白キヲ云 能ハ下スモノ也 乱心ヲ吐スルモノ也 未詳
ヘレボウルアルビス 和未詳 アルリヨムピイタケゲヘリイ

タネ根 能大戟ニ同シモノ
セエメン。ラアテスキ 根ノコト カタバテヤ

右 三種 甚強薬也 欲用吐方者不可 食前無
平生ノ汁ヲ少ツ、追々可飲吐シ盡スモノ也

治 目痛 耳鳴 癩癩 眩暈 卒倒 ス、ルコト 腸ノコト
ユロクダラム

自咽喉至檀中諸病 吐酸 肺腫物 肺病 脾病 吐盤腸産
胃

〇呼吸ニ隙飲食難成ノントノ筋ヨリ頭ニ掛一スロリダム一
アンギイナ

アマントロノ此所ニテコリカタマリ 是則腸胃ノ濕熱ナリ

呼吸ニ隙アリ 飲食モトヨリ難成 飲食トモ鼻ヨリイツルノントノ

根ニ細粒カタマリアリ 則此塊ニ痛惡寒発熱

前證ニ似タルアリ

ノントノ入口或小舌ニ堅塊アリ腫 飲食スレハ痛大ナリ 是微熱アルモ

アリ 一向無モアリ フェノ頭ノ呼吸ニサハリ ノントノ内腫ツマリテ

ハ不治 茎ノマハリ大腫強 是大方治スルコトアリ 或不思議中ニ魚骨

咬

△ノントノマハリ

シイシイナヤラハアシカモノネ俗シューローフ半分

キリモリータルタリイシコロ一フル二

右散トナシ用 白湯ニテ至極 輕キ下劑 此薬ニテ同時ハ何分哉善 肛

門ヨリツキ薬(9)

ツキ薬 ア、リハコリイナ 六十四匁 白蜜 十六匁 李油見合入

又方ツキ薬

レイシイヒイハルヒトソル 六十四匁 李油見合入 油見合入

右ツキ薬ノ仕方 □屋ノ形ノリ袋又ハフタ [豚]ノ胃袋ヲ以テ右薬温メ

シホリ入也 其上ニテ病人盛者ハ足ヨリ血ヲトル 血弱者ハ不取ノトシ

ツケ薬ハヒキ

外 ヲミコロシ 小シイイ同分丁子油見合入

内

ウカイ薬随分温メ

・セレヒシヤーヘル 天水 ア、クハヘトモヒヤー 量程合次第 クワンテムヒスシナ
アヒスシス

又方
ロフサンフーシイ 十二匁 ヲキソルヘイン 百六十匁 ア、クワヘ
ルヒヤーコラ

テラ 焼酒 十三匁 サルフルネルラア二匁 二気丹

又方
フロースサンフーニイ 一握 是ヲ水ニ出シヲキ是ヲ百六十匁

サルフルネヒーラア 一匁 ヒツテルコールアルヒイ

サカアロム サルニイ 各 シコロウ 一

右ウカイ薬 難仕時ハ水ツキヲ以テツク 口中ウルヲイ願時ハラ

フサンフーシイ 八匁 白ミツ ○メリアルヒイ 十六匁 ○サアルスフルネル

ラカ 一匁 スヒールテスサアリスキタア

右微取口中フクム外ニカタヨ血ヲトル 又ハホノリホニヒシカ

トリヨム

ミスダラクト
小産 庸

高ヨリ落時疫ノ熱ニヨリテ半産ス 又食物ニヨル 又ハ飛タリ 又ハ腹
ヲ突タリ 或ハ怒リ驚キ咳ヨリ 或ハ下利ヨリ半産ス

シキウルハイク
血ノ腐病ヲ病ト小産ス

治術ハ半産後ニハ桂枝ヲ用 橘皮モヨシ

方 アンテモウニヤデヤホレテコム 朱 ヲクリカンキリ 硫黄

珊瑚樹
コラアル

小産後
寒テ

ラアテキスガランガ ジンシイブル セドアリイ 生姜
ヌア、タメタル石

○カンキリハ蟹也 ヲクリハ目也 實蟹河海老之胃中之石也

●ブラアキンゲ 腸 ワルギンゲ 同

○ブルウキ。スポウ 吐血肺 ブルウト。ブラアカ 同

○カンカル 瘰癧也

○八丈草 薬トシテ食 以酢醬食

寝テアル時ニ

フト手ノ腕ノ

違タル様ナ時ニハ

灸ヲシテヨシ



灸所

五百三十

スベイルタルトル

沫服誤薬 服半夏

○半夏 清腸胃去痰 乾カスモノ

△白シテネハネハスル物也 ○葉ヲモンデ金瘡ニ付テヨシ

金瘡ニツケルトシメルモノ也○カンカル瘰癧ニ用ル也○ボレイヒス鼻痔ニ実ヲ付ル也 目

ノ痛ニ汁ヲ付ル・アンツテルスランガ蝮蛇ガヲソレルモノ也 是ヲ帶シメラレハ山中ニテ
蛇カ畏ル、也

○形状ハ葉ニ白キ星ガアル 実ノ色赤シテ紅花ノ如シ ヒトモジノ根ニ
ヨク似タリ 陰地ニ生シ暖国ニアルモノ也



丁子



○ヤスタンヤ栗 下利ヲシメル物ナリ カチ栗ヲ白ニテツキ粉ニシテ用ユル也

○エンデヤンスフエゲ霸王樹 打身シタルニ是ヲアテ、上カラ巻テヲクナリ

○胸ヲ打タルニハ棗 実始ハ青 後ハ赤 味瀼ル 仁ハ甚堅シ内白シ 常ニ食ス性冷下

利ヲ止ル 下血ヲ止ム 葉ハ金瘡ニ貼テヨシ 經水久下リ帶下ト成ヲ
治スルニハ蜜漬砂糖漬ニシテ用ユ○花モ下利ヲ止ム・葉ヨリ汁ヲ絞リ
テ痛甚腫物ニ救テヨシ

○ペルンキイ桃 花ヲ蜜ニ漬テ飲ハ大ニ水ヲ下シ腹ヲ和カニス ○脂ヲ飲ハ中ノ垢

ヲ抜ク 常々咳スルニ用 又吐血ヲトム 下血ヲトムル○仁ハ苦シ
脾肝ノ鬱滯ヲ開ク也 口中ノ燥乾ヲ潤スモノ也○実ハ食物ニスル計
多食ハ肉ヲ腐ラスモノ也 多不可食

○仁 腹ノ引ツリヲ緩ル物也 三四飲テ酒ヲ飲シテ酔ヌ也 身中

花ハ虫ノツヨキニ蜜ニ合シテ之ヲ用ユ 生花ヲ直ニ用レハ腹ヲ和ニシ
又吐スル也 吐スレハ汗出ル也 骨節中ノ水ヲ利スル也 肝ニ水滯タ
ルヲ下ス也 花ヲツイテ汁ヲ絞テ脉ノ上ニヌル コメカミ眉間大椎ニヌレハ反
テクル也 ○又桃花酒アリ

○故加橙橘 皮解除諸毒能取テリア、カニ 有口中臭氣者 嚙之則去臭氣

一鉢中寒氣咳者感冒用之 消化胃中食ヲ 橘肉難消化者也 不可多食
也 漬蜜砂糖而食味佳○汁橘酢合蜜常飲

○皮 橙皮橘皮甘キハ皮薄シ 酸キハ皮厚シ 能ハ橙橘 佛手カウ柑 柑子五種
トモ同シ 花ヲ油ニツケテ香氣ヲトリテ髪ニツケル也○五種ノ能水ハ

心腦ノ病ニ用ユ 除邪氣 潰砂糖人皆服 妊娠之女好食之 治腹中之

不和 去時疫之熱 止渴 汁塗手足則皺伸シワ 佛手柑之汁入眼痛良 能

治皮同 桂止渴 ○船人好飲此

ランヒキニテ

汁白桂皮取油塗動脈則中毒者必治又塗兒之臍則下虫

○癩癩

精氣不調故為此病

阿片 治吐血 撲胸 吐血者用阿片 此病先自取尺沢血

○阿魏 治子宮之病必用

○サフラン 治肺病 健心 順氣 血通 経水 安産 シコルフル 一

ツ

○テリア、カ 解諸毒 内外トモ用

根ノコト

方 ラアテキスアングレイキ 龍膽 ゲンチヤアナ ヲルセンイテ

ペタシチテ セドア、ル 各八匁 皆根為末

花 アサシノ塩

ヘルバカルデベネデキシ ヒエマル スコル 各六匁

黒ツ、ノ実ニ似タリ

バカアルム ラウリイル 四匁 ロプ。ユニイペル 九十六匁

エビユリイ タツノ実ノ汁 サンブシイ 各四十八匁

メウリス。デ。スピマト見合 右十三味

蜜ノコトナ也

吐劑 能書

吐薬 コロヲコスメタロヲリヨムノ製法

アンテモウニイ製法

ネツミ色ノ石

煇硝

アンテモウニイ ノテリイ 各百二十八匁 為末交合

右ヲ壺ニ入

白ツボ

上ニ瓦ヲ覆テ蓋ニ丸キ穴ヲ開 穴ハ火ヲ入ル為ナリ

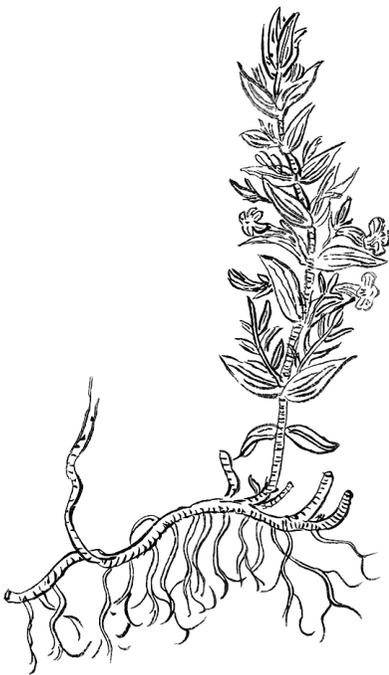
中ニ火ヲ入焼テ炭ヲ去 壺ヲ冷シテ取出用ユ 色黒紫色ニナル

白湯ニテ数度洗ヘバ後ハ黄色ニナル 是ヲ用

ガラテヨルノ囷 極テ苦 吐薬也 用一味則為吐

如茶而用 則去水氣

花色紫ノ色ノサメタル如キ花ナリ 高五六寸



○ラクシイメル。シクリテカ

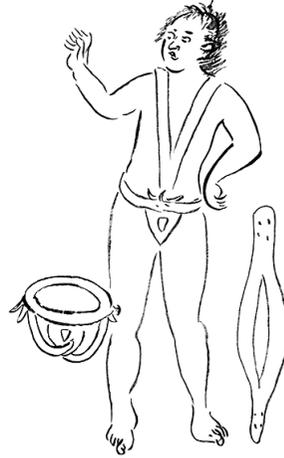
スルドナル

酢 九十六匁 水三百八十目 蜜百九十二匁

右蜜水一度ニ鍋ニ入煮 去水気 入酢 酢氣去而後鍊

地名 インデヤーンセ サフラン

紅花 通大便 催吐 以鶏煮汁用紅花 則下大便水 故用水腫



汗薬

白芷

ラアテキスアングワイカ コンタラエルハ

ゲンチャアナ キンペラトル

サルサブレラ スコラルノヲネル

ユルマル ヘルバコルデイヨベネデキシ

センタウリシイノル シヤマデル

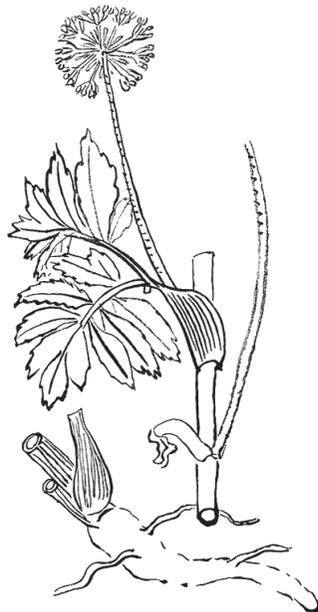
カルデマル フラクシイネゼネイフル

アゲリイカ 白芷

根実ヲ用 発散也

発汗 不用于時疫

胸中之病多用咳
血痰喘息去痰
腹痛去腸胃穢物



吉雄高及□云

○下方

ラアテキスヤウツハア タマリンド

タルタアリ

焰硝

右 五七匁用之

下後鶏煮汁加塩 一日服之 調胃

石密為末入之

目散薬

○漏下

時ナラス経水通甚シ コレ瘀血アル故也

赤白交下リ数度下ル也 後ハ大切ニナルモノナリ

膀胱ノ間ノ病ナリ

閏四月十七日

○メラニコウリヤ

癩症 物ニ驚 或シクく啼 或畏レ気ヲコラス 独居ヲ好

自身ニ吾身ノコトヲ按シ キヒシク悲ミ物ニヲソレ 胸ニ手ヲワイテアル如ク 思イ人ノ憂患ヲナスコトヲ聞コトヲ不好是心ノ臟ノ塞リ也 脾肝ノ間ノ病ナリ 大腸ノ間ニモカ、ルナリ 一説也 虫ニテ如此コトモアリ 治ハ塞ヲ開 虫ヲ殺ス 始ニ吐方ヲ用ユ アトニテ下ス 下薬ヲ用レハ 虫モ連テ下ルモノナリ 其後ハ朱砂ヲ用ユルナリ 鹿角霜モ用ユ中ヲ開ク物ヲナス也

○経閉 メンストロシロム 冷水ヲ好者経閉トナル 一説ニ胃中ニ有穢物則為経閉 気擬為此病

治術用吐方後下法

雌黄 コムキウタ 大黃

△癰 ラアズリス

△経水滞リ惣身に瘡出 水ヲ持 黒青サメタル膿ノ様ノニ臭気アルナリ 惣身ノ血カ腐ユヘ此様ニナル也 此モ胃中ニ熱物カ滞ルト此病ヲナス 下ルトキハ膽汁ノ如キモノナメ下ル 頭痛腰痛 食味ナク熱アリ 心筋カ痛ム ○治術悪物ヲ下シヌクカ治術也 後ニハサフランナドニテ順環サスルガヨキ也

十八日

△積 セイデエイ 左乳ノ下 脇下カ痛 呼吸ガヲモクシハムキ 「しわぶき」モアル 熱アリ

脉カ強数 次第ニ重クナルト痰ヲ吐 此病ハスラカアトルカ塞テナルナリ ○一説急ニ水ヲ飲テ後熱カ出テ痰ヲハクニ血カ交リテクル也 アギトガ真赤クナルガセイデエイ也 黒赤クナル也 虚実ヲ見ワクヘシ

△勞瘵 ケイル 病ノ本ハ脂ガナル也ソレヨリ起ル也 此病ヲ解テミルニ肺ノ本ノ付テアル本カ黒クナリテ肺ニ痛ノアル病ナリ・此病ハ胃中ヲワリテミルニ食カ消化セヌナリ 其マ、アルナリ 看病人ニ問ハヲト、「弟」ハ何ヲ喰タト云ニテ知ルナリ 肺ガ痛ユヘニ胃中カ化セヌナリ・始ハ咳ガアリテ後熱ツヨクナルナ

リ ○脂膜 ケイル カタクナルト熱ガ上ニ上リテ大熱トナルナリ 脂ガメリキリイルヘカ、ル故ニ此病ヲ生スルナリ 熱ガソレヨリ心ニ中リテ肺ニモ痛出ル也セメツケテ咳モ出キルナリ 熱湯ノ鍋ノ蓋ヲトリタルガ如シ ソレヨリ驚キ又静ニウキウキトセヌコトモアル也 是デ死タ人ヲ解テミレハ肺ガ拳ノ如ニナリタルモアリ 又肺ニ膿ヲ持ルモアリ⁽¹⁰⁾

○シンキンキヨリモ此病ニナルナリ シンキンキガ強クナルトテイレギニ成也 シンキンキガ肺ニ入トテイレキニ成也 殊之外難治ノ病ナリ 前ハ此病ヲナス医ハナキコトニシテアリシ也 肺ニ出物カ少シデキルト難治也 十人カ十人解テミレハ肺ニイタミガアル也 然トモ本ハゲイルヨリ起ル也 熱ハ常ニモアルモノナリ 起レハ出静レハ退ク 吐膿ニモカハリガアル也 一概ニハ云レヌ也 痰ガ有テ起ルアリ テイレキヨリ痰カ出ルアリ・咳ナクシテ痰ハアリ 吐アリ 又咽カサハルヤウニテ咳スルアリ 痰ニモ厚キアリ 薄キアリ 又咳ニテ咽ヲ破リテ血ノ交リ出モアリ ○痰血ニナルト難治ナリ 遺精スルモアリ 風引テ シンキンキガ脊ノ骨ニ入ト六ヶ敷也 天下国々ニテコマル病ナリ ・肺ニクサレカ入ト大熱トナル也・多ハ若

キ人ニアルモノナリ惣身 大熱トナル 食カナラヌ也 痰咳モカ

スル也 髪カヌケルモアル也 面ノ色カ鉛ノ如ナルアリ アギト青

クナルアリ 脉強數ナリ 痰中ニ灰色ナルモアル 痰ヲ湯ニ入テミ

膿ハ沈 痰ハ浮

ルト 又火ノ上痰ヲ吐シテミルニ臭氣甚キハモハヤ肺ニ疵ノツキタ

ル也 又紙ニハカセテ火上ニヲクモヨシ 膿臭クナリ髪ヌケルハ

必死ナリ 又此病人ニ染也 此病ハ蘆會又ハ下葉ニテモアシキ也

治所 白檀ノ赤キヲ用レハヨキ也 猪ノ血ノ水ヲランビキニテトリタルヲ

用テヨシ

痰咳ニヨリキクモノ也

○バルサムソルホウルス第一ヨキ也 蜜モヨキナリ

テレナイテイナ油ト硫黄ト合シテ用ユルモノ也

一説ニ 又硫黄ノ氣ノ物ヲ用ルモアシキ也 ○又山帰来 乾ブドウ 甘草ヲ

用ユ 又青タバコ蜜ネリニシテ用ユ 又青タバコノ汁モ用ユ 又テ

イレキニハタバコガヨキ也 又一人ハ獸ノ乳汁ハヤリニテ治シタル

アリ 乳ハ牛豚山羊等ノ乳也 茨ノ花ノ蜜漬ヲモ用ユ

又丸薬 ラウダアナ。ヲヒヤアト ケレイン 三

△

○本人云 テイレキ三通リアル 一ハ脂ノ本カ大腸ノ中ニテ引カ、ツテ

ヘタハリ付也

トルナリ 食力減シテクルソレヨリ心ニ受テシテ一身ノ病トナル 二

ハ惣身ノ血ノ分力熱トナル也 咳カ引ツ、イテ不治 心ノ臟ヘ一身中の

熱物カマクリメクリテ入也 三 肺ニ腫ガデキルト痰ガ始ハコク後ハ薄

クナル 後匂イテキル ○テイレキ「虫損」元ハ胃ニ付カハリテ腹カブ

ツトハルナリ 心カ苦クナル也「虫損」氣ガスル 咳スルコト間ナシ

食不進シテ瘦也 熱カ始終アル也 甚クナルト食ガ進也 又 熱ガ盛ニ

ナル也○明医ノ一説ニ曰 咳ツヨク呼吸重ク疲 肌膚カハキ黒ク青クナ

ル 粘痰出テ水ニ入レハ沈ム 小兒ニモ此病アリ 又大人ニモアリ 始

治シヤスシ 裏ニ入ト難治ナリ 又肺ニ瘡ノ生シタルハ数人ヲ治セシ也

病人養生第一也

木通ノ類 治術 薬品 サルサブレラ ポレホウデ ヘレネイ

キレヲス カツヘレヘネレス 車前 ヲトギリノ花

岐塗三礼草

茨 スミレ アライ 葵ノ仁 硫黄

コマ引草

バルサム。ソルホウリス ヲクリカンキリ アンテモウニイ

テヤホレラコム

右ノ類ヲ用ユ ヲクリカンキリ一匁 スピイシテヤタラカント 五匁

サアリスツヘルネエラ シコルフル 一 サルタルアライ

始硝百日 硫八匁ヲ焼タル也

ヒツテルヨラル ケレイン 六 コンペクトアルセルメスイコンプレ

イタ 一匁

サカアリヘルラアト 四匁 サカアリマルタアルライヤ 十六匁

右時ニ用日ノ中ハカリ

○氣重而疲日夜寝一身疲三十歳ノ男也 治方ハ

ア、クワシカアピサ ア、クハカルデベネキシ 各十六匁
プロベイラカセ 四匁 ヲクリカンキリ シコルフル 一ツ半

セイロハ、アフリス 八匁 ラフダアノラヒヤアト ケレイン一 右ヲ
 下地ノ薬ノ上ニ加入テ用 其后 スヘイルテス サアリスエドリシス
 右ニテ治タルナリ ○未不嫁肥タル十九歳ノ女 咳アリ 熱甚 疲 九
 日許 用下薬 甚危篤ニ及シ也 卒倒スルコト二三度ニシテ死スニ申テ
 此医是ニコリテ下薬ノアシキコトヲ知ル コレヲ出シラクハ此後ノイマ
 シメノ為ナリ 小児ノハ切々治シタル也

△一身瘦ツカレ咳シ血痰ヲハキ如膿痰モハク 初ハ血痰息カ臭クナル
 肺ニ痛カデキル 或シンキンキヨリ此病ニナル 段々裏ニ入 治ニ用ル
 物ハ大小茴香 蜜類ニテ 胸痛ヲ和クルコト也○散薬

白珊瑚樹 真珠 ラジル タルタル 赤珊瑚樹 各ケレイン七

右為末 赤茨ノ花ヲ蜜ニテネル 膏トシテシコロブル 二ツ入ル

ヘルバアリシメリ 同 ヘイツツプ

同ベルモナル 同 テスラカ

ヘルニカ 各一握 フロシリス。シカアピス

ラアテキスバルドム 同エネル

同リクリツチ ポレポウデム 各八匁

セエメンアニイシ 同フニケル 各三匁

パシユル パシユミール 十二匁

ユ、プ 八匁 サフラン 五分

右水煎服 或以蜜煮 ○又 山羊牛驢之乳汁ヨシ 有熱瘦者 用

焰硝鹿角 ヲクリカンキリ 又用乳汁^{猪獸} 又用鶏煮汁

○ピカ又ハキタトモ云

△小兒大婦人 人美味ヲ不好 土或炭或ナメシ皮 生魚 生蟹ヲ含美味ヲ進レハ吐ス

アホウノ如クナル 婦人ハ経閉トナル

治方 ア、クワ。アランドヲル ロザマレイン 各十二匁

橘皮 ヲ、リヨムタルト。ペルデリク 各一匁

セイロウプコルデキ。レシテレイ 八匁

テルメイヤ 一名 ワルメバアデン
 温泉

明礬 焰硝 丹礬塩 鐵ノ氣ニテ

△温泉ハ金銀硫黄潮ノ精ヲ湧出 多ハ金山銀山ノ近所ニ出ル也
 多ハ硫黄 鐵ノハカネノ氣ヨリ湧出ル也

主治ハヨク順ス ソレクニワタル也 清ク洗流ス ヨク物ヲ癒ス
氣血ノ塞リ

温ム 癩症ノ類ニハ皆入湯サスル也 表ニ発シタル小瘡ニモヨシ

冷テ手足痛ミ引ツリタルニヨシ 或手足振々タルヲ入ルナリ

引ツリ痛 △石淋 疝氣^{シキウルボイク} 血ノ腐 常ニ骨節痛ニ 脚氣^{ヤキト} 足手時痛 右

ノ諸症ニハ甚ヨキ也

緩

温泉ヲノメハ速ニ下ル 汗モ出ル 服シ又入ル也

ミルトシユクト 痞積

左ニヨリ^{フクレ}

△心下ヲス如クニ痛腫 按ハグウクナル 熱アリ 噫氣出 イロイロ
 ナ病ガ起ルト此病カ添モノ也 吐セント欲トイ暖氣出 疝氣ニモ添 大

便秘ス 又不通 氣息不安 動氣アリ 双痛 頭

鳴 食不進 又自^発此病ニ為^二癩症^一

此病ハ胃中ニ穢物カ塞テ上部塞リ
 テ此病ヲ起ス也

治術 △ラアヒイデス。カンコロラル 二匁 キリツス。タルタ

ルリ 一匁

リマツト。マリテヌ 五分 右為散

又方 △エツサント。マルテスコム。シユクス。ポモラル

三匁

ヒユマアル センテミニー スビイルテスコ、レヤアル

各シコロフル 二

下シ方 主治 大便秘結

ヘリフス。セイメンアネイシ 茴香 イノンドタネ 同フニケル

ラアテキス。カラシガ 同 セドア、ル

フラバ。コルデキスシテリイ 各四匁 ホ、レセエネエ

キリモリタルタリイ 各八匁 右為散 一日一匁用

外ハ外治痛ノ上ニ 温キ膏葉ヲ貼スルナリ

小兒頭瘡

耳後ヨリ面上ニ瘡出

アンテモウニイテヤホレテコム 水銀 又硫黄ノ花

○シキウルボイコ 一各 ベデルシンギ

腐ルト云コト

悪ク食物ヲナス時ハ此病ヲナス 寒国ノ人コレヲ病 内ニ居ヲ外へ出

寒シク云テ此病ニナル 船乗ニモ此病アリ 長船中ユへ也

人ニモ移ル也 寒国ノ人暖国へ行ト食物モ腐ルユへ 此病キ船中ノ水モ

船底ノ水モ腐ル 垢ノ臭カスル 第一ニ歯グキカ腐リ落

ル

ハダキ
ル也 腫ルコトモアル 紫色ニナル 黒クナル 出ル汁 瘀血ノ如ク臭

氣甚シ 齒モ動 涎モデル也 胃中火ノ如クナル 噫氣酸水ヲ吐ス 息

クサク 節々倦疲ル 時々腰カケ 又ハ臥 時々 筋々カ甚痛コトア

リ 呼吸短ク氣急也 又時々氣絶ス 心ノ臟カ動氣ス 鼻ヨリ血カ出

又下利泄瀉ス 手足ノ色赤クナリオ 所々ニ赤ク紫青キ纏ヲナス 此時

斑

ニ野菜類ヲ用レハ早速ソロソロ治スル也

治術ハ下ス也

キンデルボツケン マアゼレン
コ 痘 疹

●蟻ヲノベテ面ニツケテテラケバ疵ツカヌ

膿ヲモツ小瘡ナリ 惣身表ニ生スル 頭痛腰痛 熱ヲサソウ 疹ハ惣身

ニ小キ赤物フキ出ル 熱キヒシク腰頭痛 ノミノ喰タル如ク 腫ハ不出

也 痘ハ膿ヲモツ 疹ハ不膿也 初二三日之初ハ痘疹不分 極甚惣身以

刺

鍼如突 頭痛甚 脊骨痛 食物ヲノムニ咽痛咳氣息短 或譫語 或面腫

如火一身赤 如鍼刺形是疹也 三日四日如地腫 冷地難出 温所易出

色白 六日七日八日赤色皆去一身如粉飛而解愈 大人小兒トモニコレヲ

ヤム也

○痘ハ初熱甚凶 熱穩吉 日々増出者悪 齊出稀物良 熱渴氣短 不安

欲出 不出者悪候 如狂亦煩躁咬牙不吉 痘色紫黒而不出者皆悪 小便

血出大便血出者必死之症也 六治○第二発汗 第一前後ヲ考時節 第三看病人養生第一也

能静ニ休マスコト干要也 秘結スル物ハ肛門ニ蜜白蟻ヲ指如クサス 又

サボンヲモ指ノ如クシテ肛門ニ入ルナリ

痘毒入目治方

眼中痛如物大抵痘易入目

耳カキ程ノヒ子「匙」ニテ目薬ヲ少温テ入也

日夜数十度入テヨシ

花ノ露

ア、クワロサアロム 十六匁 酔ト白ナマリト也 鉛ヲ酔ノ上キ

サフラン各ケレイン六 サトヲル 二 ヒツテルヨラルアルビイ ケレイン 二

コロラシイ

白丹膏

右四味極細末 是目中ニ入レハ痛出ルコトアリ 若痛者ハ

丹膏ユヘナリ

去丹膏加阿片 ケレイン一カ一半ヲ

若痘未乾者ハ以鍼取膿汁 黄色ナル豌豆ノツキ汁ヲ取テ木綿ニ浸シテ手

足ニ巻テヨシ

若鼻塞者 鼻中痛者此膏ヲ毎日ヌル也

インクエントカンフラント 四匁 猪油 二匁

サカアルムサトヲリニイ シコロフル 一

ヘリシイタアヤ ケレイン 六

餘毒ハ外治ニ任スヘシ

目薬中 サカアルムサトトリニトモ云

△△サルサトヲルニ 製法 唐土 二百八十八匁 二百八十八匁 丹ニテモヨシ

薬ノセリタル壺

土器ニ入 ブドウノ酢ヲハ又ラン引ニテヨビトリ其酢ヲ唐ノ土ノ中ニ入

一ツニ交 土ハ下ニ酢ハ上ニアルコト二寸計砂ヲ器ニ入 其上ニヲキ砂

コシニ火ヲラク也 三日許シテユケカ上ルト 上ニ豆腐ノウバノ如キモ

ノカ出キル 其トキニ下ニヲロス ユバカ冷テスキ通ル ソレヲトリテ

乾アゲタルヲ サトヲルニト云 味少甘也

△△輕粉ノヤキ様 赤土ヲ敷 其上ニ鉛ヲヲキ セイロウニテムス 中

ニ鉛ニ酢ハツハツト打テ 蓋ヲシメヲクト 蓋ニ白キ粉カツク也 是輕粉也

△板ナガシノ唐ノ土 試様油ニテトキミルニ鉛ノハ色白シ 土ナレハ色ガ変スル也

△△水銀トリヤウ 火入ニ火ヲ入レ朱ヲ火ニ入テ煙ノ立ツ上ニ茶碗ヲウツムケテヲケバ煙入ル 煙盡テ碗ノ中ヲミレハ煙色ニ成テアルヲヘラニテトレバ水銀ナリ

(裏表紙)

アンギイナ 咽喉

四ノ三四

まとめと考察

卷四の概要をキーワードで示すと以下になる。

- 一 汗、吐、下と、これに関する各種の薬物
- 二 肛門ツキ薬
- 三 小産(流産)
- 四 鬱病
- 五 閉経、帯下
- 六 癩
- 七 労瘵
- 八 温泉

- 九 痞積
 十 小児頭瘡
 十一 痘、疹
 十二 輕粉、水銀の取り方

卷四では葉草が出てきて写生されている。「はじめに」で記載したように、平賀源内が頼った通詞の一人が吉雄耕牛であった。既に八年前には耕牛は、『Cruydt-Boeck』を読んでいたと考えられる。結局、源内のこの本は完成せず、一部の原稿が残っているのみである⁽¹⁾。

次に不明なままの吉雄耕牛の業績について述べる。耕牛は長崎で成秀館を開き、全国から多くの医師を集め、オランダ語と医学を教育した。初期の著名な日本の蘭学者は、ほとんど彼の教育を受けている。しかし、その学識を知る者は少ない。それは、彼が生前ほとんど著書を残さなかったことによる。富士川游の『本朝医人伝』の「吉雄耕牛」によれば⁽²⁾、『因液発備』『紅毛秘事記』『和蘭外科要方』等とあるが、彼の業績からすれば少なすぎる。

現在、報告されている耕牛の業績は、明和年間の江戸番通詞として、長崎屋で当時の江戸蘭学の先駆的学習者との交流による逸話によって知られる⁽³⁾。次に出てくるのは、『解体新書』の序⁽⁴⁾を書いたことである。さらに、梅毒の治療薬のスウィーテン水の処方をつンベリーから聞いたものを書いており、当時の梅毒治療に大きな貢献をした⁽⁵⁾。しかし、宝暦年間にこのような講義をしていたことは、ほとんど知られていない。吉雄耕牛こそが、当時の日本における第一の西洋医学の知識を持つていた人物の一人であると考えられる。

おわりに当たり、吉雄耕牛、合田強の努力と、それを伝えた合田家の末裔の方々に感謝する。

参考文献および注釈

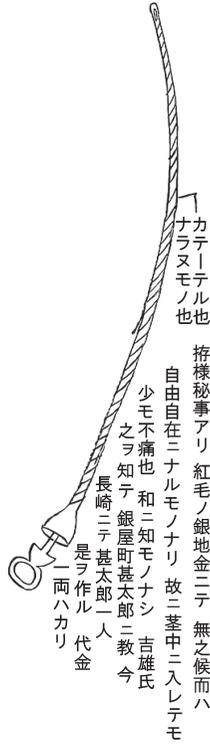
- (1) 富士川游『温恭合田求吾先生』 中外医事新報 一二三九号 一〜九ページ
 一九三六年(昭和十一年)
 右の文献から略歴をまとめた。讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市)。父は合田伝右衛門吉盤。弟は合田大介(蘭齋)。名は強、字は千之、通称求吾、温恭、号は巨龜、龜山。幼少の時、合田又玄、高橋柳哲について医を修め、宝暦二年(一七五二)二月京にて松原一閑齋に医と儒を学んだ。宝暦六年(一七五六)江戸にて望月三英につき、山脇東洋による『外台秘要方』の開板の校正に携わった。その後、長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ後、宝暦十二年(一七六二)一月長崎より讃岐へ帰る途中の南肥後で永富独嘯庵・亀井南冥に出会い、二人に長崎に遊学を勧める。墓は香川県観音寺市豊浜町和田浜。
- (2) 片桐一男『江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛』丸善ライブラリー 二〇〇〇年(平成十二年) 二三一〜二四〇頁
 左文献から吉雄耕牛の略歴をまとめた。
- 享保九年(一七二四)生 長崎 寛政十二年(一八〇〇)死 長崎
 江戸時代中期の蘭方医。吉雄流外科の開祖。初め定次郎、次いで幸佐衛門、のちに幸作、幸載と称す。諱は永章、号が耕牛、養浩齋、成秀館ともいう。長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ、少年時代からオランダ商館に出入りして、寛保二年(一七四二)、一九歳で小通詞、寛延一年(一七四八)には大通詞となった。
- (3) 長与健夫『合田求吾の『紅毛医言』について』日本医史学雑誌 三十八巻三号 八十九〜一〇〇頁 一九九二年(平成四年)
- (4) 板野俊文、田中健二 合田強の『紅毛醫言』の現代語訳 医譚 通巻一一九号 一〇二〜一三三頁 二〇一五年(平成二七年)
 永富独嘯庵の叙の吉雄氏に関する部分の口語訳。
- (5) 合田氏は通詞の吉雄氏について二か国語を理解して、一卷をしあげた。私はこのことをひもといてみると、汗、吐、下という体をきれいにすることが書かれている。全てが私が学んできた道と同じようなものであることがわかった¹⁾。

(5) 板野俊文、田中健二 合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 第六十二卷 一号 九二〜七五 二〇一六年(平成二八)

(6) 城福 勇『平賀源内』吉川弘文館 一九八六年(昭和六一) 八二〜八六頁

(7) 『紅毛医言』の叙では括弧書きで(永富独嘯庵の叙か)と疑問形で書かれている。しかし、杏雨書屋に所蔵されている『葆光秘録』には、ほぼ同文が返り点をつけた形で書かれている(原文は白文)。「葆光秘録」は、原本は独嘯庵が亡くなる前に指示して焼却させたことになっていたが、子孫が書き残した写本が残っている。また、独嘯庵の『漫遊雜記』にも、部分的には同じような内容が書かれている。よって、『紅毛医言』の叙は永富独嘯庵の書いたものである。

(8) 中根甚太郎に関して、『西洋医述 五』にカテーテルの図入りで次の説明が書かれている。
小便不通膀胱ニ満充テ通ヌトキ
小使不通膀胱ニ満充テ通ヌトキ



(9) 肛門ツキ薬 『西洋医述 卷五』に浣腸の図が出ている。



(10) 結核の病理解剖の結果について述べている。既に『西洋医述 卷三』において、病理解剖の必要性を述べ、実際、宝暦十一年九月から十二年四月まで一か月に一回解剖が行われたことを述べている。また写生を行って各臓器の形態を示している。

(11) 富士川游 富士川游著作集 第七卷 思文閣出版 一九八〇年(昭和五五) 三三九〜三四一頁

(12) 杉田玄白『蘭学事始』天眞楼蔵版 一八六九(明治二) 十二丁裏〜十五丁裏 早稲田大学蔵 洋学文庫 文庫8 A 212

(13) 杉田玄白『解体新書』東武書林 須原屋市兵衛 一七七四年(安永三) 一丁〜七丁表 早稲田大学蔵 特別 ヤ3 1060 1

(14) 文献(2) 三九〜九二頁